39 天保飢饉から幕末の混乱へ

～天保７年の志太郡・益津郡の打ちこわしからみえるもの～

１　天保飢饉と百姓一揆・打ちこわし

1832～33（天保３～４）年は全国的に天候不順による凶作となり、米不足を招いて、厳しい飢饉にみまわれた。これには諸藩が財政収入確保のため、殖産政策により商品作物生産を奨励したため、都市のみならず農村でも日頃から買入米に依存する地域が広がっていたことが根底にある。このため、米価引き下げを求めて各地で百姓一揆・打ちこわしが続発したが、財政収入確保を優先させる幕府・諸藩は適切な対策を打ち出せなかった。また、関東・東北の冷害による凶作から発生した1836年の飢饉は、さらに厳しく、このため甲斐国郡内地方や三河国加茂郡などの幕領で大規模な一揆が発生したことは、幕府に大きな衝撃を与えた。

〈表１〉浜当目村へ打ちこわしの岡部宿の者

名前	身分	年齢	職業
新蔵	無高百姓	30	日雇
伝五郎	無高百姓	44	漁業
長六	無高百姓	48	左官職
文左衛門	無高百姓	42	日雇
伝七	無高百姓	36	往還稼
権次郎	無高百姓	42	旅籠屋
久太	無高百姓	25	馬持
伝次	無高百姓	25	日雇
政八	無高百姓	23	往還稼
亀太	無高百姓	31	
弥右衛門	無高百姓	57	
甚太郎	旅籠屋甚左衛門倅	14	旅籠屋
熊次郎	無高百姓	24	往還稼
文蔵	無高百姓長八倅	29	
仁兵衛	無高百姓	31	
半四郎	無高百姓	50	
治郎七	百姓治郎助倅	20	
勘蔵	百姓勘三郎倅	24	
伝治郎	無高百姓	26	

「御代官所駿州東海道嶋田宿・岡部宿最寄村々之もの共、本多豊前守領分内江立入及騒動候一件取計方伺書」（『騒立』所収、筑波大学附属図書館所蔵）より作成

２　志太郡・益津郡の打ちこわし

静岡県域でも、1836（天保７）年には、下田町の打ちこわし、駿府城下の打ちこわし、志太・益津郡の打ちこわし、森町村・草ヶ谷村の騒立、富士郡の大宮騒動が相次いで発生している。

ここでは、1836年10月７日、８日の２度にわたる志太郡・益津郡の打ちこわしについてみていく。事件の契機は、志太郡築地上村（藤枝市）の長左衛門と益津郡浜当目村（焼津市）の鹿之右衛門の両名が、米価暴騰の折柄、10月５日の田中藩の払米（領主が年貢米を換金すること）の入札において「拾両に付、九俵にて落札」したことにあった。10月７日夜、これに憤慨した島田宿と周辺15か村の者たち700人余が、築地上村の長左衛門宅を打ちこわした。翌８日夜、これに呼応した岡部宿と周辺15か村の者たち400～500人が、浜当目村の鹿之右衛門宅の打ちこわしをねらったが、田中藩の警備が厳重であったため親戚筋の鹿五郎宅を打ちこわした。打ちこわしの対象となった志太郡築地上村の長左衛門、益津郡浜当目村の鹿五郎、鹿之右衛門は、ともに豪農で、長左衛門と鹿之右衛門はともに田中藩の「勝手向御用達」を勤め、田中藩財政に深く関与していた。一方、打ちこわし参加者は〈表１〉のように買入米に依存する都市下層民や貧農層であった。

３　打ちこわしの計画性・組織性

「御代官所駿州東海道嶋田宿・岡部宿最寄村々之もの共、本多豊前守領分内江立入及騒動候一件取計方伺書」という、事件を扱った当時の駿府代官岸本十輔が、関係者からの事情聴取の内容を幕府に提出した報告書がある〈史料１〉。この史料から、打ちこわしが事前に計画されたものであったことが判明する。

事件に先立つ９月下旬、「九月廿二日七ツ時、瀬戸川原迄三やとふ相つめ申候」、つまり９月22

日に三谷通（朝比奈川、葉梨川、瀬戸川上流域の村々）の者は瀬戸川原に集合するように、という「張紙」が岡部宿近郊の桂島村（藤枝市）、島田宿七丁目などに貼られた。三谷通は、山間地のため、主要産品である材木・薪・炭を米穀と取引して食料を確保していた。このため、買入米に依存していた東海道の宿場町と同様、1836（天保７）年の飢饉で大打撃を受けた地域であった。実際、この年７月には山間部の伊久美村（島田市）の「小前」（下層民）が、滝沢村（藤枝市）の宇八という「相応之身元」（豪農層のこと）の商人のところに多人数で押し掛け、米価引下げを要求する一件が発生している。このような情勢の中、「張紙」に呼応して打ちこわしに多数の者が参加することは必至である。そして、「張紙」の内容を裏づけるように、９月20日頃、藤枝宿の又六という人物が、村良村内（藤枝市）の朝比奈川で、打ちこわしに加わった岡部宿の伝五郎に計画を次のように打ち明けている〈史料１〉。

〈史料１〉

〔前略〕亦又六申し聞かせ候は、此節米穀高値に相成り候は全く豊前守領分内に米麦等多く買〆候ものこれ有る故、一同難渋いたし、猶又此上追々米直段、引き上げ候は眼前に付、三谷通りのもの共連れ立ち、近日の内瀬戸川原へ一同出合の上、右買〆候もの方へ押し寄せ候はば、米直段下落いたし諸人の為にこれ有り、藤枝宿は同領の儀に付、先立ち候儀出来兼、他領より騒ぎ立て候はば、右に紛れ供々押し寄せ申すべき積り、内々申し合わせに参り候趣相咄し、暫く休み居り候間、伝五郎取り揚げ候鮎望み候間、三尾遣し候処、右を持立ち帰り候処、〔後略〕

「御代官所駿州東海道嶋田宿・岡部宿最寄村々之もの共、本多豊前守領分内江立入及騒動候一件取計方伺書」（『騒立』所収、筑波大学附属図書館所蔵）

現在の米価高騰は、田中藩領内に米穀を大量に買占めている者がいるからである。このため多くの人々が難渋しつつも、さらに米価が高騰することは目に見えている。そこで近日中に、三谷通の人々が瀬戸川原へ集結して、米穀の買占め業者方へ「押寄」せる予定である。これにより米価は下落して多くの人々が助かる。なお、藤枝宿は田中藩領内なのでまっ先に蜂起できない。まず田中藩領以外の村々から「騒立」て、これに紛れて田中藩領の村々が「押寄」せる計画である。これはすでに「内々」で申し合わせたことである。

打ち明けた内容の具体性から、又六こそが打ちこわしを計画し、「張紙」を行って岡部宿、島田宿、および近隣村々の人々を扇動した、いわば首謀者であることは明らかである。

４　打ちこわしを組織する者

又六は、〈史料１〉と同じ史料の別の部分に「豊前守役場手先をいたし居候もの」とある。つまり田中藩の下級役人であった。そして取調べから、先述の７月に伊久美村「小前」が滝沢村宇八に米価引下げを要求した一件に介入して伊久美村名主甚左衛門から金品を強要したのをはじめ、多数の志太郡・益津郡の豪農層から、打ちこわしにかこつけて金品を強要していたことが発覚する。田中藩下級役人という立場上、志太郡・益津郡内外の情報を相当程度掌握しており、この情報を武器に、豪農層と困窮民との対立を調整しつつ、飢饉で困窮した人々を扇動し豪農層を脅迫して私利を貪るような存在でもあったものと推測される。

天保期を境に民衆運動が、領主の政策転換を求めるものから、世直し＝悪徳の商人や権力者を告発するものへ変化する過程で、その組織者の性格も村落のリーダー的存在から、むしろ村落から離脱し、村人から異質とされた人々－例えば侠客のような存在－へ変質する。又六もこのような人物の一人であった。

〈参考文献〉
『静岡県史』通史編４近世二　第２編第２章第１節
高橋敏「打毀しと代官―天保七年韮山代官支配所打壊しについて―」（『地方史研究』119号）
青木美智男『百姓一揆の時代』（校倉書房）